

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

○相談ウィーク

6月と10月、放課後の時間を使って、教員と生徒の二者面談を実施している。必ずしも担任ではなく、副担任との面談になることもある。生徒が学校や家庭での生活で困っていることはないか、日々頑張っていることは何か等、生徒の小さな変化を読み取っている。教員からは生徒自身の日々の頑張りや取組の様子を認める部分の話をしている。面談内容は、学年内で共有をして、必要に応じてSCにつなぎ、要観察生徒として継続した支援を行っている。生徒は、普段よく話す先生だけでなく、学校内で他に相談できる教員を見付ける機会にもなっている。困ったことがあったときには、担任以外にも相談できる雰囲気在校内で作ることができている。

【取組2】(A中学校)

○生徒会役員主催レクリエーション大会

生徒会役員が企画運営し、「第1回A中学校じゃんけん王決定戦」を実施した。各学年から希望者を募り、昼休みの武道場で行われた。大いに盛り上がり、学年や性別に関係なく、きずなを深めることができた。

参加者からも「楽しかった。」「またやりたい。」と感想があり、役員も充実した様子であった。今後も、じゃんけん以外にもレク大会を実施予定である。教員は体育館の鍵を開けたのみで、準備から片付けまで生徒会役員が中心に行うことができた。



【取組3】(B中学校)

社会の授業で、意見発表の場が毎時間設定されており、自分の意見を述べる事ができている。聞く側も発表する生徒の様子を見て、真剣に聞く様子が見られている。発表後は、必ず拍手が送られ、安心した雰囲気の中で行われている。発表に対する質問も行われ、活発な意見交換が行われるときもある。個人の発表のみならず、グループ内で意見をまとめ、発表する機会もある。この取組は4月から継続的に行っている。

【取組4】(C中学校)

校内研修と区の教育研究会にて、不登校対応や不登校生徒に対する多様な考え方等を不登校対応巡回教員が発表した。未然防止として、魅力ある学校のための「居場所づくり」、「きずなづくり」を中心に、特別支援教育の観点を踏まえて説明し、教員の理解を深めることができた。生徒指導を意識した授業についても、すぐに実践できるような内容にした。不登校対応の新たな視点や普段から取り入れている対応をより充実させることができている。

多様な学びの場を確保する取組

〔「早期支援」及び「長期化への対応」の取組〕の推進

支援会議（D中学校）

家庭環境が不安定なケースでは、SSWや子ども家庭支援センター等との連携を提案した。月1回SSWが会議に参加し、連携を図っている。校内別室に関して、利用する際のルールを再確認し、柔軟な対応ができるようにした。これにより、生徒は安心して、校内別室を利用している。

アウトリーチによる支援（B中学校）

小学生のときから不登校の、中学校2年生の自宅へ定期的に訪問を実施している。訪問を始める前に保護者と面談を行い、今後の支援方法や目標を明確にして、生徒本人にとって無理のない範囲で支援を進めていくことにした。初めは面会もできなかったが、徐々に面会して会話もできるようになった。

校内別室における支援（C中学校）

地域の民生児童委員の方にボランティアで見守りをお願いしている。児童委員の中には、児童館のスタッフをしている方もいて、校内別室を利用している生徒の小学生時代を知っている方もいた。生徒も顔見知りということで、すぐに当該の支援員と打ち解け、良好な関係を築くことができ、安定した登校につながった。学習するだけでなく、カードゲームやボードゲームを用いて楽しくコミュニケーションをとることができている。また、校内別室の隣が武道場になっているため、身体を動かしてリフレッシュする時間も設けている。



デジタル機器を活用した支援（D中学校）

オンライン授業やオンラインドリルを行っている。生徒本人の希望により、小学校の学習内容から学び直している。オンラインであれば周りに気を使うことなく、自分の課題に取り組むことができる。周囲の生徒に配慮して、音声の聞き取りにはイヤホンを使用している。



関係機関との連携（E中学校）

教育支援センター等と連携し、通っている生徒や保護者の情報を共有したことで中学校3年生の丁寧な進路指導につなげることができた。

地域の若者サポートセンターとも連携して、地域の居場所に関しても各校に周知し、卒業後の居場所としても活用している。

成 果

家庭訪問や電話連絡を続け、当該生徒は安定して週2・3日登校することができている。別室登校している生徒が「友達との関わりが楽しい」と充実している様子が見られる。

課 題

多様化する要因に対する支援をより充実していく必要がある。

教職員の不登校支援に対する意識をより高めていく必要がある。